

話す力・聞く力を高める学習の創造と評価の研究
- 聞く力を重視した対話学習の開発 -

所属校：八王子市立南大沢小学校
氏名：石川 和広
派遣先：東京学芸大学大学院

キーワード：コミュニケーション・対話・対話の構成要素・聞く力・聞くことの評価

研究の目的

人間関係が希薄になり、触れ合うことが欠如しているという子供たちの様子は、社会全体の姿でもあるが、閉じたコミュニケーション空間では、自他の関係をつくる能力を育てることは難しい。また、これまでの国語教育は、音声言語は瞬時に消え、教科書になりにくい上、授業設計や評価が難しいことなどを理由に、文字言語偏重の歴史があった。「生きる力」の育成には、人間関係を築く力としてのコミュニケーション力が大切であり、その実現は国語科の重要な役割であり、対話をその根幹ととらえた。しかし、「伝え合う」ことの価値と意義の強調は、時として伝え合わなければならないという強迫観念を生む傾向があるが、誤解をさせないことよりも、誤解を前提に相互交渉の中で補い訂正することが大切であると考え。自他の関係やその距離感をつかみ、相手を意識しつつ、自己認識を深めることを通して、関係をつくろうとする態度やその力を付けさせることが大切である。そのために、真に対話力を付けるための教材開発や指導の在り方、評価はどうあればよいのかを追究することが本研究の目的であり、特に聞く力を重視した対話学習の意義と特徴を明らかにし、実践授業を提案し、対話を国語教育の中核に据えた学習の展望を考える。

研究の方法

- 1 コミュニケーションや対話の意義や目的を先行研究をもとに明らかにし、学校教育における対話の在り方を検討する。また、対話を構成する要素やそれを支える力を検討し、実践を通して明確にする。【対話とは】
- 2 対話活動を国語科の中心に位置付けた、話すこと・聞くことの学習を検討する【学習指導の在り方】
- 3 「話す・聞く」力の育成とその評価の検討【評価】

研究の結果

1 教室における対話と学習

(1) 対話とは

対話はコミュニケーションの基本形態であり、相手の意味世界を理解しようと努めながら、自分の意味世界を広げ、深める交流活動である。お互いの考えの異同を焦点化しながら行う協同的学習を、教室における

対話活動としてとらえ、以下はその意義と目的である。

- ・お互いが伝えたいことの認識、理解、共感、納得。
- ・信頼、親睦を深め、関係を構築すること。
- ・相互交流により意味世界を深化、拡充し、新たな認識や一人では到達し得ない何かを作り出すこと。
- ・自己認識と自己変革。

(2) 対話の構成要素とそれらを支える力

受ける(聴解力)は、話の内容や意図を、質問、比較、補足などをする中で理解することである。

返す(話表力)は、瞬時の対応力を伴いながら、相手の話に沿いつつ自分の考えを加えて表現することである。コメントする力や相手の反応をモニター・調整しながら話す力が求められる。

つなげる(展開力)は、双方向のコミュニケーション・相互作用の意識ややりとりの中で質問(訊くこと)によって引き出すことを大切にする。

つくる(生成力)とは、創造的な人間関係や、相互作用により各々の認識を再構成させ新しい意味世界が対話によりつくられるということである。

考える(思考力)は、～を支える基礎とも言え、自己内対話がその鍵となる。

2 対話における聞く力

(1) 聞く・聴く・訊く

意志が強くなるほど、聞く・聴く・訊くとなる。聴くことは、正確に、要約しながら、共感し励ましながら、良質の批判をしながら、という意識をもたせる。訊く力を育てるためには、確認・経験・疑問の整理・答えの予想などをキーワードにした質問を奨励したい。

(2) 聞く力とは

これまでの音声言語の指導は、話すことに焦点が置かれたものが多い。話す・聞くは表裏一体と考えるが、聞くことを取り出した技能学習も意識して行われるべきである。国語科のカリキュラムの構造化として、聞くことと各領域との連携の在り方を考えた。

聞くことと書くことは、表現活動として、認識・思考を目に見える活動にしてより深いものにしつつ、人と関わる中で自分を相対化し、自己認識を深める。

聞くことと読むことは、読解力の向上は聞くこ

とを通してより確かなものとなるように、理解の定着・発展を図ることにより結び付く。

聞くことと話すことは、音声言語による対面的コミュニケーションにより人間同士の関係をつくる。

(3) 能動的な聞き手

対話的教授法（ソクラテス）は、学習者との対話の中で適切な問いを繰り返し、真実の認識へと導くものであった。聞くことは受け身ではなく、創造的な営み、積極的・能動的な行為であり、話し言葉の状況依存性は聞き手の補完を待つ。話し手の話題や意図に対して、目的をもち分析的・批判的に聞く中で、新たな考えをもつことができる。聞く力を育て、思考力を深め、対話の力を身に付けさせるためにも、書くことを絡ませるメモは効果的である。受け入れつつ、働きかけるといふ、話し手を育てる聞き手を意識させたい。

3 聞くことの評価

(1) 学習指導要領から読み取れる聞く力の育成

- 必要な情報を的確に聞き取る力
- 話し手の意図をとらえる力
- 情報を整理しながら聞き取る力
- 自分の感想や考えを生み出す力
- 話し合いの目的や方向をとらえる力

(2) 聞くことの評価の難しさ

聞くことは、認識や思考という内面活動であるため、評価は難しく、姿勢や態度にその対象は傾いていた。しかし、書く・話すという形にすれば、書く力・話す力の評価になる。とらえにくい聞くこと・内的なものを有形なもの・外的なものにする工夫が必要である。

聞く（主に態度）

- 話し手の表情を見ながら聞く（受けている姿）
- うなずいたり、相づちをうちながら聞く
- 表情豊かに聞く

聴く（相手の意図や内容）

- 話の中心点や要旨を考えながら聴く（中心・要旨）
- 話し手の意図や立場を考えながら聴く（意図・立場）
- 事象・意見・根拠などの関係を考えながら聴く（関係）
- 話の展開を予想し、組み立てや論理の展開を考えながら聴く（展開）
- 自分の経験や考えや他の情報と比べながら聴く（比較）
- メモに整理しながら聴く（メモ）
- 相手の話に適切なコメントをしながら聴く（コメント）
- 主張の妥当性を判断して批判的に聴く（批判）

訊く（聞き返す・質問する）

- さらに情報を得ようとしながら訊く（情報獲得）
- 確かめたり、質問したり、反論したりしながら訊く
- 相手の話を引き出そうとしながら訊く（引き出す）

(3) 聞く力の評価の在り方

目標に準拠した評価

指導目標がどこまで達成されているか、学習指導の改善を図り、子供のよさ、可能性を高めるような評価でなければならない。評価の課題や活動がリアルなものかという真正性、子供も評価行為に参加し共同で考えること、学習者自身が学習成果や新たな課題を認識するという自己評価などがそのキーワードとなる。評価とは、教師も子供も学びに対する価値付けを行うことであり、学習の再構成を図る手だてとなる。評価にあたっては、目標を絞り明確にすること、手だてを検討し工夫すること、指導と評価の一体を図ることなどを考えなければならない。

パフォーマンス評価とルーブリック

（パフォーマンス評価に関しては紙面の都合上省略）

ルーブリック（評価指標）は、達成の度合いを具体化・行動化の形で示すものであり、学習者に事前に示すことで、活動の指針・自己評価の観点となる。また、学習者自身がルーブリックを作成することにより、学習課題を検討し、活動を吟味し、評価規準を内面化し、目的意識をより高めることができる。

評価のまとめ

聞くことの評価に当たっては以下の4点を重視する。
ア 聞きながら考えるようにするため、聞くことの目的を意識化させる。

イ 聞き取りメモを活用する（メモは内的な認識・思考活動を推し量るための重要な資料であり、内面活動の分析には有効である）

ウ 訊く活動を検討する（確かめる・質問する・反論する・質すなどの積極的な訊く力を見取る）

エ 自己評価・相互評価を効果的に取り入れる。

考察

1 成果の研究

- (1) 対話の構成要素を整理し、それらを支える力を身に付けさせる実践を検討することができた。
- (2) 対話における聞く力の具体的な内容や指導方法について考察することができた。
- (3) 聞くことの評価について考察し、評価の観点について示すことができた。

2 これからの課題

- (1) 聞くことの評価を検討するための実証研究を具体的な実践により示すこと。
- (2) 聞く力を育てるための系統性、発展性を示し、新しいカリキュラムを開発すること。